

令和元年度第30期川崎市青少年問題協議会
第4回起草専門委員会 会議録

○日 時 令和2年1月28日（火）14時30分～16時00分

○場 所 川崎市役所第3庁舎 11階会議室

○出席者

(1) 委員 6名

芳川委員（委員長）、香山委員（副委員長）、藤田委員、新井委員、前川委員、岡田委員（会長・オブザーバー）

(2) 傍聴者

なし

(3) 事務局

市川室長、箱島担当課長、戸田担当係長、谷口職員

○配布資料

資料1 第30期 川崎市青少年問題協議会 起草専門委員会のスケジュール（案）

資料2 第30期 これまでの議論の経過

資料3 意見具申書（案）の構成について

参考資料1 第3回全体会会議録（案）

参考資料2 視察報告書（青少年フェスティバル）

1 開会

- ・配布資料確認
- ・会議公開についての説明
- ・会議成立についての説明

2 議事

(1) 議事1 (第30期意見具申書(案))について

芳川委員長：本日は意見具申書の起草、実際の執筆などの話を中心にしていただければと思いますので、また色々とお知恵をお借りできたらと思います。
では、資料について事務局から説明をお願いできますか。

(事務局より、資料1～3、参考資料1～2について説明)

芳川委員長：ありがとうございました。では、まず、前回、先週の青少年フェスティバルの視察について、感想や、もしくはそこから得たヒントを、前川委員、香山委員、新井委員にお話しただいて、次に、執筆に対する案がありますので、それについて、お互いに意見交換ができればいいなと本日は思っております。
まず、先週の視察について、新井委員、いかがですか。

新井委員：一番興味深かったのは、やはり参加するきっかけです。大学の場合だと単位に加えられるということは前に少し聞いたことがあるので、それを目的に参加する人がいるというのは、やっぱりなというのと、一方で、人から言われたことだけやるのではなくて、企画からできるから面白いと思って参加したという子もいて、それが一番印象に残りました。単位がもらえることで入ったけれども、もし単位は関係ないと言われても続けますという人もいたし、やっぱり関係ないんだったらやめちゃうかもしれないという人もいて、その辺が興味深かったなど。あと、母親に勧められて参加したという子もいましたが、本人だけでなく、保護者にどう訴えるかによって、青少年がそういうものに参加するかしないかは変わってくるというか、やはり保護者の影響力は結構強いんじゃないかなという印象を持ちました。以上です。

芳川委員長：ありがとうございます。前川委員、どうですか。

前川委員：前回の全体会で、議事録の前半の方に「意識の高い子」という言葉が出てくるのですが、私は実はあれにすごく違和感を覚えている、意識が高いってどんな人なのだろうと考えていました。例えば、私がこの場にいることは意識が高いのかと評価されれば、高いのかなとか。確かに他の青少年とは違う体験をしているなどは思うんですけども。でも、考えてみれば、実は意識が高い・低

いというよりも、きっかけは誰にでも平等にあるんだろうなという気がしていて、むしろそういうきっかけに偶然めぐり会って、その活動の面白さや楽しさを知っているから続けているのかなという気が、何となく私の中ではしていて、まさに青少年フェスティバルの委員たちというのもそうなのかなと。話を聞いている限り、意識が高いというよりかは、むしろ、そこの青少年フェスティバルの実行委員の中の人間関係が面白かったり、担当の市役所の職員がすごく楽しそうにしていたり、やっぱり「楽しい」ということが、継続性にもつながるのかなと思うと、最初の意識の高さや低さよりも、むしろ色々な人々に網をかけていって、その中で何かをやる楽しさ、続けていく楽しさというものを見出してもらえる方が多分、多く参加してもらったり、多く続けてもらえる気がするように、私は、視察とこの全体会話を聞いて感じたところです。

芳川委員長：なるほど。ありがとうございます。香山委員、どうですか。

香山委員：僕は、自分が子どもの権利条例施策にかかわったときに、ずっと夢パークのオープンとか子ども会議とかの進行役をやっていて、担当職員の方に過去の自分を重ねながら見ていました。

それから、単位だからやるんだみたいな子や、さっきも出てきた、母親に言われたからやるんだみたいな、全然モチベーションの低そうな感じの方が、見ていると案外しっかりやるんですよね。きちんと意見も言って。その予想と現実の違いもすごく新鮮で面白いなと思いました。また、去年やっている子がいるというのはすごく大きくて、10グループの仕切りを正味1時間半か2時間弱ぐらいでテキパキとやるわけです。夏ぐらいに集まって、全体で集まるのは数回という中で本番を迎えてしまうというのが、そうやって本当にできちゃうんだと、感心しました。それが1つ。

あとは、これはちょっと欲張りかもしれないんですけど、毎年毎年、“子どものため”に青少年フェスティバルを開催するということが慣例化されてきていて、私たちがこの青少年問題協議会の中で少し目論んでいるというか、期待しているようなところと言えば、大学生とか高校生ぐらいの世代の子が「今回はこれをやってみない？」と提案したりとか、川崎市以外のものを見に行ったりとか、そういう中でこの青少年のパワー、次世代市民がどういうことができるんだろうとか、今の子、世の中のことを見て、そういう風にちょっとシフトが変わっていったり、欲張って増えていったりとか、子どものためのフェスティバル+αができてくると素敵なのかなと、むしろ私たちはそういうものを期待しているのかなというのがあります。以上です。

芳川委員長：ありがとうございました。私個人の感想も少し話をさせていただきますと、すごく勉強になりました。まず、主に取材をさせていただいたのは、高校生が2人、大学生が3人でしたが、実は高校生と大学生ではスタートの動機がちょっと違う感じがしました。高校生はすごく漠然とした感じですね。その

子だけで全ての高校生を論じるわけにいかないんですが、その子は横浜の高校に通っていて、どんなにポスターがあったり、インターネットがあったりしていても、川崎についてのものを興味や関心を持って見たということはないと言っていました。目には入っているんでしょうけれども、行こうとは思わなかったという感じのことを言っていて、そんな中で母親の勧めもあって、また、帰宅部が暇になってきてみたいなのもあって、青少年フェスティバルの活動に参加したと。高校生は、そういうすごく漠然とした感じで、直接のきっかけのような部分があって動いてくれているのですが、一方で大学生はもう少しモチベーションがはっきりしているなという感じがするですよ。例えば、自分の将来に結びつくとか、あるいは自分の興味関心に結びつくとか。単位のためにというような言葉もありましたが、その裏にあるのは、やっぱり子どもに興味関心があったからだとか、社会福祉を勉強しているからだとか、つまり、将来に結びついたりとか、自分が興味・関心のある方向性やキーワードに結びつくと動くんですよ。

中高生世代については、多分、大学生ほどはっきりとしたモチベーションはないので、それをどういう風に土台として持っていったらいいのか、工夫が必要なんじゃないかなという感じがしたんです。そういう意味では、年齢によってニーズ、多様性が違うんじゃないかなという気がしました。

あと、継続性について考えたときに、社会福祉の学生が今年2年目ということでしたが、その方から聞いていくと、昨年、ちょっと先生の紹介で入ってみたら、すごく面白かった。そして、自分で色々なことを考えて企画することができた。なおかつ、将来は社会福祉の分野に進もうと思っているので、グループワークが必要だった。自分自身のニーズと、あとちょっと関わって見た経験とが重なって、今年が2年目ということです。それが継続性というものを見るときのヒントになるのかなと思ったりもしましたね。

では、それらも踏まえて、そろそろ書くところの、執筆の方に話を進めたいと思いますので、いかがです、事務局として何かありますか。

事務局：お手元に第29期のときの意見具申書の実物をお配りしました。これは最終的にまとめたものですが、ここに行き着くまでの間には、先生方に色々なパートを書いていただいて、それを組み合わせたりとか、場合によっては、隣の章からこっちに持ってきた方がいいものとか、そういった組み合わせをさせていただきました。書く時点ではなかなか全体がイメージできないので、それぞれのパートを作成してもらった後に全体を見て、もし本当に必要なことがあれば、そこから引き抜いて別の章に例えば持って行って組み合わせるとか、そういうことは必要になってくるのかなと思っています。その辺の調整につきましては、事務局の方でも一生懸命考えてやりたいと思うんですけども、そこについては、芳川先生とか岡田先生、最後にまとめていただく両者に、本来の趣旨と合っているのかどうかといった点を御確認していただきながら組み合わせをしていければと考えているところでございます。

芳川委員長：いかがですか。資料に各パートの担当の名前は一応書いているんですけども、本当に今回、起草委員会としても色々なことを議論してきましたので、そこを、この章には入らないんだけどもここに入れてほしいとか、そういう風に出していただいて、あと、事務局と会長と委員長で検討していくという風な感じなんですけど、どうですか。

香山委員：よくわかりました。

新井委員：少し話が戻ってしまうかもしれないんだけど、主体的に関わるというのが、主体的でないなら関わってくれなくてもいいよというような意味にもとられないかなど。この間の視察でも、親に言われたからとりあえず来たという子もいて。最初の参加はどうでもいいけれども、結果的に参加してくれて、その結果どうなったのかという、要はその結果が大事なわけで、どこまで主体的というのを強く訴えるか。参加することをメインにするのか、主体的でなければ意味が無いんだよという主体的というのをメインにするのかという、その辺のニュアンスはどうですか。皆さんで少し共有しておかないと、構成とか何かもそれによって変わるんじゃないですか。

芳川委員長：いかがですか。主体性というものをかなり強く出すか、それとも、そうじゃなくて、どういうスタートであっても継続性、多様性という風に見ていったらいいのか、どの程度主体性というものを考えるかということですね。

藤田委員：私が感じたニュアンスとしては、先ほど前川委員がおっしゃったように、実は最初から主体的なわけではなくて、それぞれの色々なきっかけで色々なことを始めるんだけど、それをやっていく中で恐らく主体性が芽生えていくだろうという気がちょっとしています。その主体性まで発揮させるためには、継続してやっているとか、色々なチャンネルがあるとか、そんな形で主体性というのが芽生えていくのかなと思いますし、それを私たちはどういう仕組みで支えていくのかということだと思ってしまうので、お母さんに言われたから来たとか、それもいいんじゃないかという気は私はしています。単位のためだと言って、そうやって嘘ぶくのもいい気はしますね。

前川委員：私も同じように思います。子ども会で中高生のジュニアリーダーの子たちが各区の代表で集まって、自分の区でやっていることを発表する会議があるんですけども、その会議の回数等がだいぶ増えてきたときに、改めて会議という場を設けた方がいいのかという話が大人の中であって、1年間そこで考えさせようということで、その会議を来年なくすか、なくすとしたらどういう形にするのか、実際にやるならどういう形でやるのか、みたいなことを子ども達に考えさせたときに、実は出てきた答えは全部既存のものだったんです。子ども会

のジュニアリーダーとして中心でやっている高校生ぐらいの子たちからですら新しい意見が出ないということは、おそらく主体性が芽生えるということは結構ハードルとしては高く、創造することがあまりできていないという言い方もよくないですけども、難しいのかなというような気がちょっとしています。それは多分、青少年フェスティバルでも同じことで、実はあの箱とあれだけの集客力があるけれども、おそらくあれを何人かでゼロから創造するということは難しいのかなという気がしています。

現に、例えば、実行委員長もやっていた私からすれば、30人も実行委員がいれば、申し訳ないけれども、舞台だって彼らに任せちゃっていいだろうなど。舞台は、前から私たちの団体（むげん）がやっているんですけども、むしろもっと色々なところにチャンネルができるんだけれども、恐らく継続性がなかったり、ほとんどの委員が新しくかわってしまったりして、やっぱり前見たものが絶対的なものだと思ってしまうような、私もそうなんですけれども、そういうマインドは多分どこかにあるのかなという気がします。

そうするとやっぱり、主体性というよりは、よく来てやったなど、まずその一步一步を認めてあげる方がいいような、主体性を前面に出し過ぎると多分誰も寄りつかなくなってしまうような気がしました。

芳川委員長：私は、親に言われてやったとしても、単位のためであったとしても、十分に主体的ではないかと解釈しているんですよ。というのは、親に言われても動かない子は多分動かない気がしますし、大学の授業で先生が説明したからといって、参加する子は参加しますし、参加しない子は参加しないわけですよ。そういう意味では、そこを選んだ目的は多分色々で、支える部分はあるかもしれないんですけども、選んだこと自体が主体的なんじゃないかなという感じがして。そういう意味では、最初から、ゼロからつくっていく主体性を考えるのか、それとも、きっかけがあったら乗っかるということでも主体性と認めるかどうかということですが、乗ったということも主体性でいいのかなといった感じが私の中であるんですが、いかがですか。

新井委員：確かにそれも1つの考え方だと思うんですけども、私が言いたいのは、一般の人たちが見たときにどう判断するか。やっぱり主体的というと、人に言われたんじゃないで、自分が自らやったというのが主体的と考えるのが一般的で、一般の人がこれを見たときにどう考えるかだと思うんです。一般の人もそういう風に考えるように誘導するような書き方にしないと、やっぱり主体的という自分で自らという風に思っちゃう。

前川委員：確かにこの協議題でいうと、主体的な社会参加という、今、私がぱっと思っただのは、投票とかそういった行動とかにもなるのかなみたいな気が、自分から何かを自らやるというのは確かにそうだなと。

藤田委員：そうすると、この「主体的な社会参加」というのは協議題になっちゃっている
ので、これを変えるのは難しいので、サブタイトルの方でもうちょっとハード
ルは低いんですよという風にしておくと誤解が少なくなるんですかね。

岡田会長：全体会でサブタイトルが変わりますという話はできるはずですから、そこはい
いですよね。

香山委員：今の若者を取り巻く環境とかを考えたときに、また、若者が持っている興味・
関心が多種多様で、多忙であったりとか、そういうことを考えたときに、我々
がこれをつくっていく過程で、やっぱり色々な主体性というのを我々が考えて
提示するという側面があっても面白いのかなとは思いますがね。

藤田委員：意見具申案の1、2とか、その辺のところでは主体性というのは一体何だろうと。
この委員会で考える主体性とはこういうものだみたいなことを書くような部
分があってもいいかもしれませんね。

新井委員：例えば、色々な方向性にしても、あるいは課題にしても、仕組みをつくるのは、
要するに参加しやすいような仕組みをつくるべきであって、子どもたちが手を
挙げてぱっとやるんじゃないで、すっと入りやすい、抜けたければすぐ抜けて
もいいんだよ、そんな入りやすいものを仕組みにしているのかなと。それとも、
そうじゃなくて、もっと立派な器があって、そこにより主体的に、自ら入って
いくんだよという風な方向に持っていくのか。その辺で書き方が変わってくる
ような気がするんです。

藤田委員：今のおっしゃった2つでいえば、どちらかというとは私は前者の考え方なので、
きちきちとした、これじゃなきゃ主体的じゃないみたいなのではなくて、
色々な入り方があっていいじゃんという、そういう方がいいかなと思います。
そして、色々なところに仕掛けがあって、ここに入ってみたら別のきっかけで
こっちは面白そうとかという、色々なそういうものが町のあちこちにあるよう
な川崎になるといいなと思ったんです。

前川委員：川崎ワカモノ未来PROJECTの発表会に12月に行かせていただいたときの話なん
ですけども、全体で約20人ぐらいが発表する中で、そのうちの2人か3人は、
実は実際に行動できていなかったんです。受験勉強があって、考えるだけ考えて、
何も私はできていません、ごめんなさいと、すごくにこやかな顔をして言う子も
いました。でも、それも1つ、ありなんだろうなと。その子はもう受験が落ちつ
いて、今月中には決まるから来月、年が明けてから私は頑張りますみたいなこと
を言っていたので、そういう種に火をつけることができたことも、多分、このプ
ロジェクトの1つの成功なのかなというような気がして。残って頑張っていた
子だったりとか、目に見える形の成果というものがつい評価されがちですけれ

ども、実はそういう火の灯り方も、参加の仕方としてはありなんだと、今、腑に落ちました。

芳川委員長：ありがとうございます。今の話に関して1点、前期の意見具申書と今回の案で何が違うかと少し比べてみたのですが、「川崎市の青少年を取り巻く現状」というのが今回の案では初めて出てくるんですが、前作の場合は「子ども・若者を取り巻く現状」なんですよ。つまり、そこには本来ならば、例えば今の子どもたちの主体性だとか活動であったりとか、そこあたりの話が、この取り巻く現状をさっと出してきちゃうと、テーマの意味や、協議題に至るまでの経緯はどこに書いたらいいのかみたいになってしまう気がします。そういう意味では、現状の前に本来はもう1章必要じゃないですか。

岡田会長：「はじめに」で書くというよりは、どこかでそういう皆さん方の議論を最初にしっかりと持ってこないと、その後に展開ができないだろうと思いますね。

新井委員：前期と同じような組み立てで考えたときに、前期は多世代交流の必要性というのが子ども・若者を取り巻く現状の章の次にきていて、これでいくと、今回、主体的の解釈は別にして、要するに主体的に取り組むのが必要だということなので、同じところに入りますよね。そのための仕掛けとか仕組みとかはどうなんでしょうかというのが次にあって、じゃあ他都市はどうなっていますかというのが次に来て、じゃあ川崎市としてはどういう方向に持っていけばいいんですかというのが最後にくると。

芳川委員長：そうすると、「青少年を取り巻く現状」と「青少年に関する課題」の間に入れるのがいいですかね。

藤田委員：その間に独立したのを入れるのもいいですし、「課題」のところでもそういうのを絡めて書いていただくという考えもあるとは思いますが。

芳川委員長：それもありませんよ。

藤田委員：主体性といったって、そもそも大人の私たちだってそんな風にしていないよね。そういうのを子どもに求めたって無理だという話ですよ。

岡田会長：議論を蒸し返して申し訳ないんだけど、今回の「主体的な社会参加を考える」というテーマになってきた経緯をもう一度振り返りたいと思うのですが。

新井委員：第29期を受けて、社会参加するときにそれなりの意識を持って参加しないと、本当の参加にならないだろう、身につかないだろうと。それにはやっぱり主体的に、自分の意識を持って参加しなきゃダメですよ、ということだと思えます。

それを、意識がない者は駄目よ、とするんじゃないくて、我々が主体性を持たせるような仕組みをつくるにはどうしたらいいかということですね。主体的に参加するには、どういう仕組みをすれば参加しやすくなるかという。

岡田会長：その辺のところは、少しどこかに書かれていないと、何か唐突にこれが出てきた感じがしますね。

新井委員：大人の指導で、こうやれ、右向けと言ったら右に向くという、あるいは若い人たちがまとまって楽しい楽しいとって参加しているのでは全然身につかないということから、多分、主体的に参加しないと、この間の視察にもあったように、すぐ飽きちゃうわけです。人に言われたとおりにやっているだけでは、何回かやれば飽きちゃう。この間の視察でもあったように、企画からできるとか、自分の意見を反映できるとか、そういうことによって段々と主体的に参加できるようになるという方向に持って行って、そうして初めて自分の糧になるということだと思います。

岡田会長：そうすると、今までの議論から言うと、今ここで言う「課題」のどこかでそれを書いていくという形になりますよね。そうすると、次の視察なんだけれども、この3つの視察先がキーワードの“継続性”と“多様性”を象徴するとすれば、ふれあい館は“多様性”で、最初のワカモノ未来PROJECTは何ですかね。

新井委員：まさに主体的。自分で手を挙げたらしいから。

前川委員：手を挙げた子もいれば、なかなかできなかった子もいたという、そういう色々な主体性があったんだみたいな話ですよ。

岡田会長：そうすると、最後の青少年フェスティバルは“継続性”なんですか。

新井委員：実際に長く続いていますしね。

岡田委員：そういう捉え方もできるということですね。そうしたら、それを受けて、最後の提案という形になりますね。結論はどうするか。これはまた芳川先生が最初に文を起こしたとしても、全員でどういう方向性にするか、どこかで1度論議した上で最初の取りまとめをしていかないと、結論は書けないですね。

新井委員：そういうことですね。

岡田委員：そうすると、この資料には今、委員のメンバーの担当しか書いていないので、これは例示かもしれないですけども、「今後の方向性」という部分は、若者代表で前川さんにも入ってもらわないと結論づけられない。

前川委員：もちろん、幾らでも。

芳川委員長：時間がそろそろ近づいてまいりまして、今、会長が言ってくださったように、「青少年を取り巻く現状」の部分はそのままで、「青少年に関する課題」の新井委員と大草委員のところに主体的なというところを入れていただいて、あと、「今後の方向性」の部分に前川委員も入っていただいて、という風な感じでとりあえず書いていただきましょうか。

(2) 議事2について

芳川委員長：議事2「その他」は、今後のスケジュールについて、事務局の方から説明をお願いします。

(事務局より、意見具申書案の作成期限、次回の起草専門委員会の日程等について説明)

芳川委員長：ありがとうございました。では、本日の議事はこれで終了いたしますので、進行を事務局にお返しします。どうもありがとうございました。

事務局：熱心な御討議、ありがとうございました。また次回、3月の後半にこの委員会がありますので、それまでの間、御協力をいただきながら意見具申書案を形にしていって、次回の会議の場で皆さんからまた貴重な御意見をいただければ幸いです。本日は本当にありがとうございました。